

「タステナギーの肘掛け椅子―カトーバ族の伝説」

ウイリアム・ギルモア・シムズ 作

中村正廣 訳

第一章

既に木枯らしの月を迎え、落葉の季節であつた。カトーバの獵師たちは足早に狩獵に出発した。四方八方に少人数の集団となつて向かい、大がかりな狩獵が始まつて二週間も経たぬうちに部族は幾つかの集団に分かれ、それぞれが個々の戦士の采配に任された。狩獵隊はその先導者の好みやいつもの習慣に従つて向かう先を決めた。インディアンの中にはカワウソ狩りの腕前で評判を取つた者たちもあり、彼らはカワウソに負けず長時間頭を水に沈めて泳ぐことができ、頭を水面に出して息をつくカワウソの尻から遠く引き離されることはなかつた。この連中は浅瀬や湿地や木々が鬱蒼と茂る沼地の方角に向かつた。そこはカワウソが好んで集まる場所として知られていた。熊の獵師はトウの茂みとビートル²を探し求めた。黒熊は蜜蜂の巣を両手に抱え込むところがあり、それを捨てて逃げることは滅多にないため、インディアンの獵師に会つたが最後命はない。血氣盛んな獵師は山々に向かい、褐色の狼や鹿を追いかけた。実を言

うと、彼らはこのような冒険を伴わぬ勝利の喜びに満足するような腰抜け連中を誰彼なしに輕蔑の眼差しを浴びせて冷笑するのであった。部族の中の騒々しい連中を注意深く避けるようにして、二人一組で出発するインディアンも大勢あった。少数ではあったが、屈強で腕前に自信のある者たち―彼らは部族連合の中でも頑固に独身を守り通していた―は自分から進んでただ独りで前進していった。老人たちは罾や網を、少年たちは吹き矢筒を準備し、獵師たちが決めたグループに分かれて、女たちと一緒にゆつくりと獵師たちについて行った。彼らは毛布と粉末状の穀類を持っていき、夜になると皆によく知られた場所で野営した。前もって整えられた手はずに従い獵師たちは夕方になると獲物を持ってそこへ大勢でやつてくるのであった。これらの部族の中にはカトーバ川の流れに沿って進む一団もあり、その源流まで向かう一行もあった。またパレット川とブロード川³に突進する一団もある。向こう見ずで足が速いという点で誰にも負けない連中は、タイガー川⁴やスパータンバーグ⁵の辺りの緩やかに起伏する山々まで足を伸ばすことも厭わなかった。

この方角に向かう二人の戰士があつた。一人はその名をコナティイといい、この獵師ほど勇敢で運に恵まれた者は他になかった。しかし彼にはザンティピ⁶よりも口やかましい妻があつた。この女は部族の驚異であるとともに恐怖の的であり、エノリー⁷の灰色の惡魔であるタステナギーの片目の妻と全く同じ醜い顔をしていた。彼女の舌が動き出すと、ターキータウン⁸の大胆な獵師であつても「こつそり逃げ出せ」という合図となつた。礼儀正しい若い女性なら皆そう思うのだが、醜い妻を持ったハンサムな夫に同情した若い女性たちは彼女の惡言を耳にすると、「ほら、可哀相なコナティイが家に戻つたよ」と言つたものだ。夫が手ぶらで歸つてこようものなら、村中の者にお馴染みのあの冷酷な雷の嵐が決まつて荒れ

狂ったものだ。村の一番外れにあるところまでこの嵐は決まって響き渡ったのである。

今回の狩猟の旅でコナティの相棒となつたのは、部族連合の中でも最もハンサムな若者のひとり、セロニーという青年だった。上背があり、その背筋は松の木のように真つ直ぐ伸びていて、チョワニー族の戦士との戦いで何度か遠征したとき、その腕前と勇気を見せつけたこともある。チェロキ族との戦いで出陣して敵の駐屯部隊を攻撃したときは、戦略において彼を出し抜いたり、実際の攻撃において彼を打ち負かすことのできるチェロキ族の若い戦士は一人もいなかった。猟師としての彼の名声もこれに劣ることはなかった。部族の中で狼を捕らえるのを最も得意としている者をも恥じ入らせるほどの腕前であり、高齢の父チフォンティの住まいが肉を切らすことは一度もなかった。妻帯者のコナティが独身のセロニーとこれほど親しくするのは誠に不思議なことであつた。二人の間には特にこれといった共感はなかったからである。しかし、何度か狩猟の旅で一緒になつた二人が懇意の間柄になつても、奇妙なことに、コナティの口やかましい妻は公然と小言を言つたり邪魔したりすることはなかった。夫の行動をよく思うことは余りなく、また夫の友人や親交を認めることなど殊更少ない妻ではあつたが、夫の相棒がセロニーとなると、その非難の言葉はすっかり影を潜めるのであつた。この若い猟師が夫と一緒に家にやつて来ると、これ以上おとなしく、優しく、思いやりのある妻はどこにもいないという風に決まつて変身してしまうのである。このため、この哀れな男はセロニーを家に連れて戻るとき最も満ち足りた気分を満喫できるのであつた。哀れなコナティはこの時だけは権勢をふるうマクラーを何とか我慢できる御仁と自分に思わせることができた。彼がこのような人間と、このような口やかましい途轍もなく醜い女とどうして結婚したのか、これは一つの謎であつた。若い猟師のモカシンを繕いながらカトーバの乙女たちはかなりの推測を

この件にかけてみたのだが、この謎を解明できる者は誰一人いなかった。ただ、この悪趣味と、誰の目にも明らかな既婚者という立場にも拘わらず、コナティーは乙女たちの間で今でも人望を集めていることだけは付け加えておきたい。あるいはこれは彼の妻が誰からも忌み嫌われているせいかもしれない。彼女たちはオピチ・マネイトウが、つまり彼女たちが信仰する黒い悪魔が、この口やかましい女を自分の手元に引き取り、哀れなコナティーがもっと優しい配偶者を得て幸せになるというもつともな希望を持てるようにしてくれるよう願ったのだが、乙女たちの動機を深く詮索しなければ、もしかするとこの願いは慈悲の心から出たものと解することもできよう。

第二章

さて、コナティーとセロニーはターキータウンの煙が見えないところまでやってきた。家を牛耳る女房の言葉が聞こえなくなつて解放感を味わう恐妻家は、意気揚々とした気分を心から楽しんだ。家ではいつも節度を失わぬよう感情を抑える彼は、足枷手枷の状態にあり、これを大いに埋め合わせるべく冗談とユーモアを思う存分口にするのであった。セロニーもこの陽気な気分と一緒に楽しんだが、後からやってくる女たちをまいてしまおう、道草を食わず急いでタイガー川を渡ってしまおうというのが二人の一致した決意であった。パコレット川に接する有名な猟場に辿り着くまでの二人の足取りを、ここで逐一辿る必要はあるまい。なぜならそこまで彼らは道すがら立ち止まって猟をすることもなく、従つて二人の動きに興味を添えるような事件はほとんどなかったからである。しかし二人は川に着くと、すぐに谷道に向かった。

これまで何回か狩猟の季節に訪れたこともあり、勝手知ったるところであつて、パコレット川とこれと平行して流れているシケッティ川¹⁰と呼ばれる小川の間にあつた。シケッティ川はエスワウプデナー川¹¹の支流であり、彼らが望む獲物を必ずや見つけることができるはずのところであつた。昔その場所は狼の群の隠れ場として有名であつた。敵を待つ戦士のように幾分じれつたさを覚えながら、二人の猟師は一番強い矢柄と一番尖つた矢尻を準備し、藪の一番密生したところに鋭い目を向けると、大胆不敵にもその中へ飛び込んでいった。さほど遠くまで進まないうちに、途轍もなく大きな雄の狼が一匹、二人の行く手に突然姿を現した。最初セロニーの矢は狼の上の方の数本の小枝をかすめたため、狼の負つた傷は浅く、恐ろしい唸り声を上げながらコナティーを目がけて突進してきた。コナティーの矢は妨害を受けることなく狼の前方の肩の下、脇腹を貫き、その完全に怒り狂つてゐる獣に致命傷とは言わないまでも深手を与えた。狼は猪突猛進してコナティーに迫つたが、野蠻人の方もその場にただじつと突つ立つてはいなかつた。立木の後ろに飛び退き、狼の白い牙が狙つた性急な一撃を避けたかと思うと、次の瞬間には矢を弓につがえていた。狙いは寸分違わず、矢の石尻は震えるようにして飛び、けむくじやらの怪物の心臓に突き刺さつた。狼は断末魔の苦しみを見せてシケッティ・クリークの沼地に猛進した。狩猟を続けていた二人はこの小川の水際まで来ていたのである。コナティーが見ていると、狼は猛烈な勢いで二度、三度、前方へ突進したが、それから鼻を水につけて静かになると、小川の水に流され、鋭く湾曲した小さな角の辺りで見えなくなった。しかし、当時インディアンの猟師が射抜いた獲物を見逃すことはそうあることではなかつた。川に駆け寄つた彼は、房飾りのついた鹿皮製の狩猟服を土手に脱ぎ捨て、その脇に弓矢、モカシン、脚絆を置き、ナイフだけ手に持つと、近づいてくるセロニーに自分の持ち物を見守ってくれるよう声をかけて

から、獲物を追いかけて水に飛び込んだ。セロニーはコナティーが最初二度三度と力強く弓を放つのを見てからは、友人の行動に別段注意を払うことはなかった。今回のような狩りが危険をもたらすといったことはなく、辛苦に慣れた恐れを知らぬこの種族にとつて慎重を期す必要はなかったのである。このためセロニーは退屈しのぎに、二人がまだ通り抜けていなかった茂った林に入っていく、自分にも他の楽しみがないものかと探していた。その林から雌の狼を狩り出すと、やらねばならぬ仕事が出てきて自分のことで精一杯になった。セロニーが狼の見えるところまで最初やってきたとき、狼はイグサや木の葉の床に横になつており、それを巨大なレッドオークの這い出た根の下にこしらえていた。五匹もの狼の子が声一つ上げずに母親の回りに寝ている。どうやら母狼が彼女なりのやり方で子供たちにそのように強要したらしく、セロニーが姿を見せるまでは堅く沈黙を守っていた。姿を見せた彼を見た獐猛な獣たちは、その本能を抑えられなくなり、母親と一緒にたて入者に対して大きな短いほえ声を、鳴き声を上げた。小さな目は火のようにかつと燃え、生えたばかりの歯がちらほらと目につく赤い顎は、人間への猛烈な憎しみを露わにして歯ざしりしている。この憎しみは狼の本性ではあるけれども、セロニーにとつては好運なことになり、このときは余りに弱いものであり、近づいても危険ではなかった。しかし雌親にはもつと注意を払う必要があつた。前足をひとなぎするようにして子供を後ろに引き寄せると、今にも逃げる素振りを見せながら、頭上にある木の枝の下までゆっくり下がりはじめたが、鋭い燃えるような目は獵師にしっかりと向けられたままであつた。しかしセロニーがやすやすと獲物を逃がすはずもなかった。コナティーの成功を目にしたセロニーは、友人が手にした勝利が証明する武勇よりもつと完全な武勇の証しとして——雌は雄と変わらぬ力を持ちながらも雄の倍の素早い動きができ、子連れのときの獐猛さは雄の倍はあると言つてよい——

この雌狼に白羽の矢を立てる覚悟を密かに決めていたのである。セロニーの目は狼の目に据えられ、狼は狼で一瞬たりとも彼から目を離すことはなかった。自分が動けばすぐに狼は必ず自分に飛びかかってくることは十分承知しており、まずは狼の目をそらす必要があった。構えている弓を上げずに彼は自分の犬に合図するかの様に鋭く口笛を吹いた。それから、この合図に応えて返すといった感じで、インディアンの子供を襲われるのを案じているかの様に、怒りを見せる獣の鋭い目は突然辺りを見回した。その瞬間、セロニーの矢は狼の首を貫き、狼がセロニーが立っているところを目がけて飛びかかってきたときには、セロニーの姿はどこにも見えなかった。

狼との間に一本の木を挟むようにして狼の動きを窺いながら、セロニーは次の矢柄を準備した。一方、狼はゆっくりと子供の方へ下がったが、再び彼の方を振り向く間もないうちに次の矢が狼に次のさらにひどい傷を負わせていた。それでもセロニーはこの獰猛な動物が持つている桁外れの生命力を十分承知しており、矢を放つたびに慎重に位置を変え、大きくも小さくもない木、つまり狼の鉤爪から身を守ることができるほどの大きさがあり、それでいて自由的に狙うことができる程度の小さな木の後ろに身を隠すように細心の注意を払った。それでも敵から二十歩以上も下がることは一度もなかった。子供のもとを離れることができず力を分散された狼が遠くまで追ってこれないことはわかっていた。このようにして戦いを続けた彼は、五本もの矢を狼の体に深く突き刺していた。六本目の矢が狼の目を射抜いたとき、近寄つても安全だと考えた彼はその行動に出た。最後の矢を受けた狼は傷のために逆上し、我を忘れて子供のもとを離れ、身もだえしながら突進し、攻めてくる敵に少しでも近づこうとむなしくもがいた。セロニーはこ

の機会を逃さず相手との距離を縮めて戦う覚悟を決めた。狼と取っ組み合うのがカトーバ族の戦士の大きな自慢であり、狼がまだもがいているときにその胸から小刻みに打ち震える心臓をえぐり取ることも同様であった。戦士は木の後ろに弓と矢を置くと、左手には大枝の太い棒か切れ端らしきものを持ち、右手には白刃のナイフを掴んで狼の子供の中へ飛び込んでいき、その棒で子供の一匹の頭に激しい一撃を見舞ってやった。その子供の鋭い鳴き声と、他の子供たちの唸り声に、踵を返した憤怒の狼はぼんやりとしか見えない目で、騒ぎの方角を頼りに唸り声を上げながら獵師目がけて突進してきた。素早い鋭い視線を送りながら、腹を据えた彼は狼が近づくのをじっと待った。鋭い歯で攻撃しようとして狼が頭を後ろにそらしたとき、彼は左手に持っていた松の棒切れをその大きく開けた口の中へ突っ込み、これをしっかり押つけて狼を倒し、狼は尻餅をついた格好となった。この間にも狼の子供たちは自分たちの間に大胆に置かれた戦士の踵にかじりついたが無力であった。しかし彼はこれを気にもかけなかった。これよりは大きい獐猛な闘士の方への注意を怠ることはできなかった。発作的に生じる傷の苦痛に刺激された狼は力を振り絞っており、彼は優位な形勢を逆転されないためにもてきぱきとしつかりと相手に対処する必要があった。今や獐猛な獣は木に噛みついており、彼は木を狼の口に残したまま、自由になった手で狼の喉を捕まえ、狼の腹に巧みにしつかりと一撃を食らわすことができるように狼を持ち上げると、ナイフを深く一突きし、胸の骨に当たるまで刃を上突き上げた。死の断末魔の苦しみを見せながらのたうち回っている狼を突き刺し切り裂いた彼が、狼の心臓を取り出し、狼の子供たちに放り投げてやると、子供たちはそれに飛びついてがつがつ食べた。これが終わると、セロニーは子供たちの頭を軽くたたいて優しく撫でながら、肉をくれともがいている彼らの耳にフォークのような形の切り込みを入れてからその破片を小袋に入れると、

狼の子供たちをそれ以上傷つけることはせず、狼の楽しみは将来の獵師のために残しておいた。雌親の頭皮を剥いでこの狩獵の記念物を手にした彼は、コナティーの服を置いてきた場所に取って返した。服は全く乱れることもなくコナティーが置いたところにそのまま残されていた。

第三章

ところでコナティーはこの間ずっとどこにいたのだろうか。仕留めた獐猛な狼を追って川に入ってから数時間経っており、これほど長く姿を見せもせず、それも服を身にまとわずにいることは妙である。寒い不愉快な陽気であり、どんなに頑丈な獵師でも、服が目と鼻の先のあるのに自分の好みで身を切るような寒さにじつと我慢するなんてことはありえない。こう考えると連れの身に何かあったのではないかという不安がセロニーの脳裏をよぎった。大声で呼んでみたが、返事はない。川の中でこむらがえりを起こし、痙攣が治まらないまま溺れ死んでしまったのか。このような危険は季節によって、また体調によつては、どんなに泳ぎのうまい者でも起こりうることなのだ。セロニーはコナティーの試みの結果がわかるまで小川のそばで待つていなかった自分を責めた。この若い獵師の心は多くの恐怖と疑念に苛まされた。川の土手を歩いて行つては声を限りに叫んでみたが、森と川がコナティーの名を何度もこだまするだけであつた。他に応えるものは何もなかった。恐怖は募るばかりで、それに恐怖はますます不快なものとなつていく。このような状態でセロニーは小川に飛び込むと、コナティーが獐猛な狼を追いかけていったとき、その狼が流れのために進む方向を変えようとしたところに向かいながら、向こう岸へ進んで行つた。ほど

なく渡り終えた彼は、まもなくして川縁の灰色の砂の上に連れの獵師の足跡を見つけた。狼の死体を引きずった跡も見つけることもできた彼の心は躍った。獣の血にまみれた皮から落ちた血痕がはつきり残っており、このまま跡を辿っていけばすぐに仲間のところに行けるはずと確信したセロニーは喜んだ。しかしそうは行かなかった。森の中へ五十ヤードも行かないうちに、森のねじれた木の中でも一番ふしくれた錯雑とした、ねじれた倒木の木の根本の辺りで仲間の足跡はわからなくなった。そこで形跡はすべて消えていた。コナティーはそこにいないばかりか、これから先後をつけるべき手がかりを何ひとつ残してはいなかった。これほど妙なことはなかった。ねじれた木のところまでは足跡ははつきり残っていたのだが、この木のところで足跡は消えていた。彼は周りの森の四方八方に目を配り探してみた。木立ひとつ見逃すこともなかった。平地も藪も孤立した丘も見逃さなかったが、やがて彼は狼の皮が剥がれたところへ戻ってきた。へとへとになり、言葉では言い尽くせないくらいに悲しみに沈んでいた。仲間が溺れたと考えたり、チェロキー族の捕虜になったのだと思ったりもした。だが、川から足跡が続いており、それ以外の足跡は見えなかった。それに後者の考えに関する限り、あれほど勇敢で奸計にたけた戦士が、警報を発することすらできないまま敵の罠にまんまとかかり連れ去られるなんてことはありえない。たとえそうであったとしても、敵に気づかれずに自分が何事もなく通れるなんてことがあるだろうか。「まさか」ここでセロニーの心に次のかすかな思いが自然に生じてきた、「この今も追いかけていたら大変だ！」この思いに雄々しい若者は飛び上がるように立ち上がった。「あいつらが探しているのは太った七面鳥なんかじゃないぞ」と叫んだ彼は、両肩に下げた革ひもから一本の矢を取り出し、それを弓につがえたが、忙しく素早く動くその目は森のあらゆる影を見つめ、鋭い耳は物音ひとつ聞き逃さなかった。しかし敵の気配は全く

なく、奇妙な悲しげな静寂が森を包んでいるだけであつた。生きとし生けるものの中でセロニーほど惨めなものではなかつた。声がかれ喉が痛くなるまで、祈るようにして彼は大声でコナティーの名を叫んだ。彼はもう一度川に戻り、もう一度川面目がけて飛び込むと、四分の一マイルほど下流のこんもり茂った緑したたる島に向けて総身の力を振り絞つて泳ぎ出した。連れの猟師が他の獲物を求めて島の方へふらつと向かつたということも考えられないことはなかつたからである。そこは木がうつそうと茂っているが小さな島で、ものの一時間で横切ることができた。何も見つからず、彼は連れと別れた場所へ戻つた。服は隠したところにそのまま置かれていた。この辺りを、彼は向こう岸でやつたのと同じやり方で歩き回つた。地面を入念に調べ、連れの体がまず向かつたとは思われないところまであちこち覗き込んでみたりした。

その日も終わりに近づき、夜がやつてきたが、それでもこの辛抱強い猟師は搜索をあきらめなかつた。真夜中に彼は二人が別れた木の根元に立つていたが、疲れ果ててはいるものの眠気は感じず、見込みのない搜索が続くたびにどうしても彼の心に募り高まつてきた不安にひどく悩まされていた。夜が明け、彼は再び搜索に精出した。この不幸な戦士は前の晩横切つた土地をすべてもう一度調べ直す覚悟であつた。再び川を渡り、まだはつきり残っているコナティーの足跡を一步一步辿つていった。足跡は川とは反対方向に向かつていることを彼は再び確かめたが、コナティーが川へ戻つていないことは明らかであつた。だが倒木が横たわっている所に辿り着くと形跡はすべて消えた。セロニーはねじれた木をよく調べ、そのだらしなく伸びたねじれた枝の下に潜り込み、根が引き抜かれてできた穴に押し入つて、コナティーの名を再び叫び、聞こえるんなら答えられるんであれば答えてくれと懇願したが、ただこだまが彼の声を返すだけであつた。しかしこだまは次第に消え、ただ静寂だけが彼を包んだ。その静寂は彼の搜索は絶望的である

ということを前よりもさらに声高に彼の心に語りかけた。それでも彼は搜索をあきらめなかったが、その日もやがて無駄に終わった。その夜彼は前と同じように地面の上に寝た。夜明けとともに再び調べたが、同じく不首尾であつた。これを終えると、彼は野営地に戻ることに決めた。一人で始めていた猟を続けようとする気力はもうなかった。彼の心は悲しみに塞がれ、手足は疲れ果てており、彼の部族と近隣の部族の間で勇士として猟師として名声を馳せたあの不屈の精力は微塵も感じなかった。コナティーの服を自分の両肩に結んだ彼は今や彼の目に神聖なものに見える仲間の弓と矢を手に取り家路についた。次の日の正午に彼は野営地に着いた。

第四章

猟師たちは皆森に出かけており、野営地には妻や子供たちしか残っていなかった。辺鄙な村の見えるところまでセロニーは来ると、キャンプの煙にすっかり背を向けるようにして森の端にあつた丸太に腰をかけた。こうしていると、彼に近づこうとする者は一人もいなかった。しかし夜になり、猟師たちが一人、また一人と帰ってくると、セロニーは彼らに近づいた。女たちのもとから猟師たちを呼び寄せた彼は自分の話を語った。

「狼の長は妙なことを言っておる」老人の一人が疑っているような笑みを浮かべて言った。

「父よ、これは真実の話です」と答えが返ってきた。

「コナティーは勇敢な長じやつた」

「そうです、実に勇敢でした」セロニーは言った。

「それが、あいつには見る目がなかったと言うのか」

「太陽に向かって飛び立つあの偉大なる鳥にもその目は負けませんでした」という受け答え。

「コナティーが愚か者だと言った色カケスはどこにおる」

「そんなことを言った色カケスがあれば、父よ、その鳥は嘘をついたのです」とセロニーは言葉を返した。

「なのに狼の酋長セロニーは戻ってきて、コナティーは見る目を持たず見えなかったと語るのか。雌の狼を射止めることのできぬ臆病者だと、どこに足を踏み入れたらいいのかわからぬ愚か者だというのか。わしの耳元で騒ぎ立てる色カケスと同じじや。セロニーは自分の兄弟について嘘をついておる。セロニーは自分のナイフでコナティーを殺したのじや。そこじや、セロニーのその戦いの服にはコナティーの血がついておる」

「これは雌の狼の血だ」若い戦士は怒りを露わに叫んだが、無理もなかった。

「コナティーを殺したセロニーをどう処置するかは酋長連が決める。それまでセロニーを小屋の裏手の森に連れて行け」

「賢い酋長エマスラの命令に従ってセロニーは向こうへ行く」と若い戦士は答えた。「酋長たちがどういう処置が妥当か決定するまで、セロニーは小屋の後ろで待つし、コナティーのために死ぬと言うなら、それで結構だ。セロニーは死ぬことなど怖くもなんともない。しかしコナティーの血はセロニーの戦いの服についてはいない。これは母狼の血だと言ったはずだ」こう言い残すと、若い酋長は狼の子供から取っ

た耳の先と一緒に、彼が殺した狼の毛皮を取り出し、座っていた場所にそれを置くと、それ以上何も言わず、裁定を下そうとしている会議の場所から引き下がった。

第五章

引き続き行われた協議は周到で真剣なものであった。コナティーがその仲間に殺されたことは酋長連にとつてほとんど疑う余地のないものであった。連れの獵師が持つていた武器や身につけていた服をそっくりそのままセロニーが持ち帰ったからである。彼らにはセロニーの体が浴びている血はコナティーのものに思えた。セロニーの悲しみに暮れた心も悲しみに打ちひしがれた顔も、彼らの目には苦惱というより寧ろ罪意識を表しているとしか見えなかった。長い間酋長連は協議を重ねた。セロニーを助けたいと思っている友人も幾らかいたが、勲功の人によくあるように、彼にはまた敵もいた。自分たちが嫉妬し、ライバルであり、また恐れている戦士でもあるセロニーを目の前から追い出す機会が到来したことに、敵の連中は喜んだ。セロニーにとつては不幸なことに、部族の掟はただ彼の敵の悪意を増長するだけであった。これらの掟はメディア人やペルシア人のそれと同じく断固たるもので、消息を絶った獵師の命に対して自分の命で贖うことを求めた。従つてセロニーに与えることができ、彼が手に入れることができる寛大さと言え、コナティーを見つけて部族のもとへ連れ戻すための一月の猶予が与えられるかもしれないということだけであった。

「セロニーはコナティーを捜しに行くか。風の強い月¹²はセロニーのもの。コナティーを部族のもとへ

連れて来るがよい」若い戦士が酋長連の前に再び引き出された時、彼らはこう言った。

「コナティーを見つけるためなら死んでもよい」これが答えであった。

「もし見つけられなければ命はない」酋長のエマスラは答えた。

「結構だ」若い戦士は静かに話した。「セロニーは出かけてよいのか」

「風の強い月はセロニーのものだ。コナティーを見つけ出せなかったらテント小屋に戻って来るか」これがエマスラの質問であった。

「セロニーは逃げるような犬畜生か」戦士は憤怒を露わに強い調子で尋ねた。「エマスラはセロニーの話を信用しないのなら、セロニーの左右か片側に若い戦士をつければよい」

「セロニーは一人で出かけ、コナティーを連れ戻せ」

第六章

皆から殺人犯と見られ、実際にそのような判決を下された者に、このように信頼を寄せることはインディアンの間ではよくあることであり、またこの信頼が裏切られることはほとんどない。裁きから逃げ出せば社会的地位を失うこととなり、これはいかなる死の恐怖——勿論インディアンは死を避けることもあるが、それは恐怖心からではない——よりもインディアンにとっては大きな恐怖なのである。部族の間で社会的地位を失うことは、それに続く社会的追放はさておき、実際のところ魂を失うことに等しい。部族の法的保護から外れた者は偉大なるマネイトウの楽園に入ることは許されず、従ってそのような人間は悪魔

であるオピチ・マネイトウの奴隷に似合らしい札付きの存在なのである。立派な最期を遂げるために戻ってくるかどうかセロニーに問うことは、エマスラには言わずもがなの侮辱と思われた。しかしエマスラはセロニーの敵に与する必要があつた。

不首尾に終わつた暁にはこのような暗澹たる道しか残されていない若い獵師は、コナティーが姿を消した不吉な川へ戻つていった。避けられぬ不名誉な運命を避けたいと切に思うのと変わらぬ程度に友人のことを一心に思うこの若者は、いかなる労も厭わず、いかなる努力も惜しまず、一力所たりとも見落とすこともなかつたし、また、コナティーの運命を包む謎を突き止めるために獵師に知られた技はひとつとして使わずにすますこともなかつた。しかし実りのない骨折りの日々が幾日も過ぎていき、搜索に割り当てられた月の最後のかすかな細長い輪郭が、部族の仮住まいのテント小屋に重い足取りで向かう彼の行く手に悲しげな光を照らしていた。

再び彼は部族会議の前の席に着き、自分に予定された運命に耳を傾けた。判決が下されると、彼は矢を束ねた紐を解き、腰の紐を緩め、隣の森で切つた小さな若木の緑色の樹皮で作つた髪紐を頭に巻いてから、立ち上がつて偉大なる戦士にふさわしい言葉使用と気迫を見せながら次のように話した。

「いかにも結構だ。酋長たちは自分の意見を述べたが、狼の酋長がおののくことはない。彼は狩獵は好きだが、鹿を追うことを禁じられたからといって女々しく泣いたりはいしない。チェロキ族の若い野ウサギの肝を潰すのは好きだが、俺の助けがなくてもチェロキ族を征服できると言われたとしてもそれを嘆くことはない。長老の皆さん、俺はこれまで鹿と狼を殺してきた。俺のテント小屋はその耳で一杯だ。俺は小屋を歩くとき頭皮が膝の辺りまで来るまでチェロキ族を殺してきた。俺が暗い谷に行くとき、俺に

は栄光の輝きがある。これまで白髪の男たちに劣らず勝利を手に入れてきたが、俺の髪には白髪は一本もない。これ以上言うことはない。ここにある矢の一本一本が俺の行為を語っている。若者たちに弓の準備をさせ、命というものにまもなく突き刺さる矢に幅の広い石をつけさせるがよい。そうすれば部族の者に死に方のお手本を見せてやる」

このように命令された彼らは、セロニーを処刑場へ連れて行つた。そこは野営地の後ろにある小さな空き地で、彼の遺体を埋めるために既に穴が掘つてあつた。進みながら彼は彼の側に仕える若者たちに自らの勝利について詳細に語つて聞かせた。一人一人に一本の矢を与えて持たせ、その矢とともに、他の戦士や森の野獣と対戦したときに武勇を見せつけた事件について語つて聞かせた。若者たちは一人一人がこれらの偉業を記憶し、その語り部となり、そしてその際、この非常に厳かな国家的儀式の際に物語とともに与えられた矢を見せることを求められた。かようにして部族の伝統は受け継がれていくのである。セロニーは墓のところまで来るとその前に陣取つたが、矢を持った死刑執行人たちは既に準備を整えていた。部族の者たちが一人残らず処刑を一目見ようと集まつており、戦士と少年は最も目立つ位置に、女たちはその後ろに立つていた。厳粛な静けさがその場を支配しており、犠牲者に残された時間はわずかであつた。このときコナティの妻が皮を剥いだしなやかな棒を両手に持つて、いかにも怒つた様子で群衆の中から駆け込んで来ると、セロニーの両肩を打ちつけながら、次のように叫んだ、

「さあ、ついて来るんだ。この卑怯者め、死なせるもんか。お前はコナティの家の戸口に寝て、コナティの妻に鹿肉を持つてくるんだよ。あたしの小屋に肉を持つてくる者がいてはいけなかいのかい。セロニー、お前がそれをやるんだよ。死なせるもんか」

この言葉に群衆の間からざわめきが起こった。

「あの女はコナティーの代わりにセロニーを夫として要求している。確かにそうだ、その権利はある」セロニーの敵は反対することはできなかった。実際のところ、ほとんどの部族でインディアンの法によつて認められている特権をこの未亡人は行使したのだ。今回の件で彼女の行動を支配している主張が間違つていないことはどの村人にとつても十分明らかなことであつた。コナティーがいなくなつた今、この女を扶養する者が一人もいないことは明らかであつた。息子も男の親戚もおらず、実に醜惡な顔をしているこの惡名高い口汚い女が、今は亡き前夫ほど世事に疎く言いなりになる夫を手に入れることなど望むべくもないことであつた。女はセロニーの両肩を手ひどく叩きながら、立ち上がつて自分についてくるように再び彼に命令した。

「お前はこの卑怯者に獵の鹿肉を持ち帰らせるために自分の小屋に連れて帰りたいのか」老酋長のエマスは強い調子で尋ねた。

「そう言つたじゃないか」口汚い女は叫んだ、「聞こえないのかい。その卑怯者はあたしのもんさ、あたしについて来いと言つているんだよ」

「俺の心の臓を狙う親切な矢はないのか」彼の手にかかつて死んだと思われている夫の代わりをするよう要求している女の命令に、若い戰士はぶつぶつ呟いた。既に下りていた墓の穴からゆっくり上に上りながら、彼は部族の掟に従う覺悟を決めた。セロニーを見守る敵ですら今や敵愾心を弱めており、友人たちの同情はセロニーが死の淵にあつたときよりも更に大きくなつた。部族の乙女たちはかような途方もない犠牲を目の当たりにして激しく泣いた。一方、勝ち誇つた醜い女は、犠牲者を完全に支配下に置いたこと

を意識しているかのように、幾度となく杖を打ちつけながら若者を追い立てていった。自分が部族中の乙女たちからひどく嫌われていることを知っており、結婚すれば誰しも誇りと思うはずの男性を自分が手に入れたことを見せつけ得意になった。これを見せつけるために女は捕虜を連れて女性群の間を通り抜けた。二人が通れるように乙女たちが悲しげな表情で右に左に道を開けると、セロニーは突然足を止め、一番離れたところで他の者に隠れて立っている乙女の一人に身振りで合図した。目に涙を溜めていなくても、涙では表し得ない大きな悲しみの表情を目に浮かべてその乙女は見守っていた。両手をしっかりと握りしめ、身を震わしながら、育ちの良い乙女は近寄った。

「あれは夢だったのか」セロニーは悲しげに言った、「さえずる小鳥の愛について、ちよろちよろ流れる小川のほとりの緑の小屋のことについてこの僕に話したのは。青トウモロコシの種が盛り土から芽を出すまで少しだけ待つて、そのときはメドリーはあなたの小屋にやつて来てあなたの側に座ると、この僕に甘く囁いた声は夢だったのか。言ってくれ、メドリー、今のこれがうつつなのか」

「セロニー、あなたの言う通りよ、これは夢じゃないのよ」乙女の答えは途切れ途切れに返ってきたが、それは悲しみに打ちひしがれていることを物語っていた。

「でもみんながセロニーを他の女性のテント小屋に行かせようとしている。マクラーをセロニーの腕に抱かせるつもりだ」

「ああ、ああ、どうしてこんな」

「メドリー、これを見てくれ。君はこれを見て、それからここを立ち去って君の小屋に戻り僕を忘れるための明るい歌を歌うことができるか」

「忘れるなんて、セロニー、そんな」

「メドリー、君はセロニーに愛された人だ。君が彼を失うことなんてできない。他の女がセロニーを小屋へ連れて行くことがあったら君の心は深く悲しむはずだ」

涙が止めどもなく頬を伝って流れ、乙女は激しくすすり泣いたが、一言も口に出さなかった。

「メドリー、君が苦しむくらいなら、いつそのこと僕のベルトからナイフを取って、その鋭い刃を僕の心の臓に突き刺してくれ。お願いだ」

少女ははつきりと恐怖の色を顔に浮かべて後じさりした。

「そうしてくれば、メドリー、君に感謝する」これが戦士の口から続いて出てきた言葉であった。乙女は両手で顔を覆いながら顔を彼から背けた。

「セロニー、私にはできない。ナイフでああなたの心の臓を突き刺すなんてことできるはずがない。さあ行つて、あの女のものになるのよ。メドリーはあなたを殺すなんてことできない。そんな、メドリーが死んだ方がまし」

「わかった」若者は悲しく捨て鉢な声で叫びながら、マクラーの小屋に向かって再び進み始めた。

第七章

ここで話をコナティーに戻すことにして、小川の中で狼が苦しくもがいているのを見た彼が、セロニーのもとを離れて水に入り、狼を追いかけた瞬間からの彼の足取りを追ってみよう。もう読者の皆さんはコ

ナティーが首尾よくこの動物を川から引き上げ、その皮を手に入れたことは既にご存じのことと思う。この作業が完全に終わらぬうちに、森の中で彼の頭上を素早く走る音が聞こえてきた。すぐ近くで別の獲物が手に入るかもしれないと考えたコナティーは、ナイフ以外の武器は持っていなかったが、狩猟の記念物が増えるという希望の高ぶりを覚え、その場所へと急いだ。ところが、そこに行ってみると獲物の姿はない。巨大で異様に形の崩れた一本の松の木が、ねじ曲がった不揃いの形をして地面に倒れており、木の上をかなり入り組んだ枝が覆っていたため、コナティーは木の根の奥の方に猛獣が巣穴を作っているかもしれないと考えた。こう思ったコナティーは四方に伸びた枝の下に這って入り、入り組んだところをくまなく探してみた。不首尾に終わった探索から戻った彼は、その木の幹の上に座り、目の前に狼の毛皮を広げると、肉片を毛皮から剥ぎ取り始めた。急いで狼の皮を剥いだため、まだ肉片が毛皮にくっついていたのである。しかし、この作業を始めるや否や、彼が腰掛けた倒木の二本の巨大な枝が彼の両股に巻きつき、彼をその場に縛りつけてしまった。体を動かそうともがくと、他の枝が彼の両腕をつかんで両肩を覆ってきたから、彼は身の毛のよだつ思いであった。懸命に叫び声を上げようとしたが、口を十分に開けられないうちに他の枝で口をしつかり押さえられてしまった。樹皮の小さな穴から目を凝らして見ると、何とか見えたものは両腕と同じく枝で覆われた自分の両脚だけであった。それでもじっと見続けた彼の目には自分の体は見えなかった。自分の体で他に目に入るものは何もない。緑色のビロードのような苔の絨毯が彼の膝を覆っている。両方の膝頭とも棘のように隆起して突き出ている。両手は両太腿に張りついているが、木の残りの部分と同様しつかりと樹皮という外皮に包まれている。非常に驚いたことに、ナイフや狼の毛皮までも同じような状態であり、樹皮はそれらをひとつにして、木をゆがめている無数の巨大で突き出た瘤の一つ

に変えていた。思考する力も意識も残っていないが、コナティーは体を動かすことも全くなくなってしまった。金切り声を上げようとしたが、口は圧迫されたときのように収縮してしまい、口がどんなにあらがつても無駄であつたし、一方で、彼の顔の前には野生の蔓が垂れており、彼が体を動かす度に、また木が揺れる度に、蔓の上で大きくなっていた棘が圧迫するようにして口の中へ入ってくる。哀れな獵師はすぐに事態を理解した。彼はエノリーの灰色の悪魔であるタステナギー¹³の手中にあつたのだ。彼が腰を下ろした木は彼の部族の伝説が「タステナギーの肘掛け椅子」と呼んできた例の魔法の木の一つであつた。油断している者を陥れるこの罠を使つて、邪悪な悪魔は被害者を捕らえ、相手の苦難に小躍りして喜ぶのだ。死が解放してくれるときまで囚われの身となる犠牲者もあつた。この魔手の餌食になつた犠牲者を、この悪魔が不意に慈悲心や上機嫌から逃がすことなど滅多にあることではなかつた。コナティーに残された希望は、セロニーが今の自分のこの事態に気づいてくれるかもしれないということだけであつた。そうなれば彼の救助は実に簡単に容易なことであつた。枝を切り落とすか樹皮をはぎ取りさえすればよく、犠牲者を昔と変わらぬ姿のまま助け出すことができるのである。しかしコナティーを見つけ出すことなど望むべくもなかつた。自分が捕縛されていることをはつきり告げようにもその声が出せなかつた。体を動かして仲間目の真実を明かす力が彼にはなかつた。ある天与の直感でもって相棒が思いも寄らぬことをやつてのけてくれなければ、自分はこの今の惨めな捕縛状態のまま死ぬしかないとその不運な囚人は思った。このような苦しい確信が胸中をよぎっているとき、彼の耳にセロニーが遠くの方で何度も叫ぶ声が聞こえてきた。まもなく若者が彼の身を案じながら四方八方をくまなく捜しているのが見えた。ようやく若者はコナティーが縛られているまさにその木のところまで彼の跡を辿つてきて、彼と同じように木の枝の下に這

つて入ったが、彼とは違つてその幹に腰を下ろして捕まることはなかった。ただ二言三言だけ、かすかではあつたけれども、この不幸な獵師は声に出し、若者に自分の事態を知らせようと努力した。この努力も機能不全のかすかな息づかいとなつて次第に消えていき、蕾をつけ始めた花が出すかすかな溜息のように彼の耳に聞こえただけであつた。手足を必死に動かそうとしてはみたが、これも同じく失敗に終わった。全身をしつかりと捕まえられた彼は、手足一本たりとも微動だにできなかった。そうこうしながら彼は相棒が行っている懸命な探索を見つめていたが、それを見ている彼はなおさらに若者を慕わしく思つていた。しかし、夜がやつてきて仲間が立ち去るのを見た彼は、身の毛もよだつような戦慄に襲われた。その夜は本当に惨めな気持ちだつた。彼の相手をしてくれたのは灰色の悪魔の声だけであり、彼と彼の片目の妻は彼の今の状況をからかい、一晚中次のような残酷な嘲りとうつつと思案させるような話で彼を突つたのであつた。

「コナティー、誰かがお前の代わりとならん限りここから逃げ出すことはできんぞ。俺の手から逃げたければ、お前が置き去りにして構わんと思つてゐる人間をお前の膝に座らせることだ」こう言いながら、灰色の悪魔はコナティーの両肩に腰をかけ、すつかり囲まれたこの獵師のろくに見えない目を赤い目でのぞき込み、やつと獲物をしつかり捕まえた暴君のように狂喜しながらにらみつけた。ようやく夜は過ぎ、夜明けとともにセロニーが再び姿を見せたのを見たとき、コナティーの絶望的な心はどれほど元気を回復したのか。そのとき彼はタステナギーが言ったこと、つまり、置き去りにして構わない人物を彼の膝に座らせるまで逃げ出すことはできないという言葉を思い出した。セロニーがこれをやるかもしれないという漠然とした考えが彼の心に浮かんだが、しかし自分の友人を置き去りにすることに彼が同意するという

ことがありうるだろうか。人生は楽しいし、誘惑は大きかった。セロニーが近寄ってきて疲れて腰を下ろしてくれればいいと、ついもう少しで思ったりもした。この願いを察知したかのように、そのとき若い獵師は近寄ってきた。しかし、近づいてくるセロニーを思いやるコナティの気持ちは強くなり、囚われの身でありながら必死に身をよじりもがき、同時に友人に警告して叫び声を上げようと懸命であった。自分の苦境から逃れるために友人の今の状況につけ込むことだけはすまいという崇高な覚悟を見せていた。すると、コナティの警告が実際にセロニーの心に通じたかのように、若者は踵を返すと再び危険な場所から急いで立ち去った。セロニーが去ってしまうと、囚人が楽しみにしていた望みは萎えてしまった。部族の者が誰一人として現れないまま、そして今の事態の変化がまったくないまま、一時間また一時間と時が経っていったとき、助からぬものと彼はついに観念した。灰色の悪魔と片目の妻の嘲り笑いだけが一晚中彼の耳を襲い、朝になったとき彼は絶望の淵にあつた。彼は自分の運命を甘受したが、その決意は、このような形で死にたくはないと思いつつも、これまで何度も死に立ち向かってきたために敢然と抵抗するのを諦めた人のそれであつた。

第八章

しかし、セロニーの胸裏から希望が完全に消え去ったわけではなかった。恐らく自分に降りかかった数奇な運命のせいであろう、彼は友人の生死に関わる謎についてさらに念入りに調べる決意を固めたのであつた。マクラーの小屋に入った日の彼は、この世で最も惨めな人間であつた。この忌々しい醜い老婆は、

友人の妻として友人を虐待することで名を馳せたときも実に不愉快な女であつたが、今や妻として迎えた彼にとつてその倍も厭わしい女であつた。二人きりになると、女はあの名だたる無情で口やかましい態度をさつさと脱ぎ捨て、艶めかしい仕草を見せながら、若者の首に両腕を回して彼の愛情の証しをせがんでくるのであつた。そんなとき、むかつきに似た嫌悪感が若者の心に以前からとりついていた憎しみと一緒にあつた。女の抱擁から飛び退くと、彼はとても言いようのない悲痛な気持ちで小屋を飛び出し、森の方へ足を向け、まもなく部族の野営地から見えなくなつた。セロニーは友人を連れ戻すためにもう一度探す決意を固めていた。彼の決意はこれだけではなかつた。彼は自分に押しつけられた運命に二度と戻るつもりは毛頭なく、コナティーを部族のもとへ連れ戻すことができれば、自分で自分に宣告した部族追放を、つまりどこか遠い見知らぬ森の中へ突き進んでいく覚悟であつた。昔は何よりも彼の胸中を支配していた愛情とか愛国心といった絆に無情になつた彼は、今や身を委ねるのは友情か絶望しかなかった。コナティーを連れ戻さねばカトーバには希望はなかつたし、カトーバの外には希望も愛もあり得なかつた。どちらにしても彼には惨めな生活しか望めなかつたが、最悪の形の悲惨さは自分が今逃げてきたマクラーの小屋にあつた。しかし、マクラーはそのような決意に屈するような人間ではなかつた。女は幸運によつて手に入れた取り替え品に十分満足しており、その品を簡単に手放そうとはしなかつた。セロニーがひどく慌てて小屋から飛び出したとき、女はすぐに彼の決意を推し量ることができた。できるだけ急いで彼の後を追つた女は、追いついた暁には、従順なコナティーをたびたび脅して服従させていた例の雷を使えば、この後釜に座つた若者に同じ程度の力を發揮できるとほとんど信じて疑わなかつた。マクラーはグレイハウンドのように痩せており、足の速さもセロニーにほとんど劣ることはなかつた。それに女は十三歳

の灰色リスのように遅しい体をしていた。後をつけていることを相手に悟られなければセロニーに追いつけると高をくくっていた。そこで、女は最初は用心して進んで行つた。セロニーが最初向かつた方角を注意深く見守っていたこの女は、彼が友人とはぐれたか、もしくは友人を殺したかした獵場に戻るつもりだと読んだ。女はこの獵場については彼に劣らないほどよく知っていた。セロニーは自分でもわからぬうちに女の胸に激しい恋心を吹き込んで、今出かけていく男の後を追う女の素早い動きと意志の堅さはその恋心でもってしか説明できないものであつた。翌日女の叫び声を後方で聞いたセロニーは完全に狼狽してしまつた。しかし女の声を耳にしたとき、彼は不満ではなく驚きを覚えた。この人の良い若者はコナテイーをカトーバ族の立派な戦士の一人と見ており、彼の妻が同じように考えているという思いに感銘を受けたのである。まさか女が自分に狙いをつけているとは思ひもしない彼は、女の夫の最期を証明することに繋がるはつきり目に見える証拠を見せれば、自分が殺人犯でないばかりか、コナテイーも實際は殺されていいかもしれないと女に納得させるのに役立つかもしれないと信じていたのである。このため彼は女が近づいてくるのを落ち着いて待ち、もう一度自分の主張を始め、女の夫を女と部族に再び取り戻すという自分が抱いている希望を口にして自分の話を語つたのである。しかし、女の答へには非難と懇願しかなかった。これが巧く行かぬとわかると、女は前の日女の小屋まで彼を無理矢理連れていったときの杖で彼を思いつきり殴り始めた。だがセロニーは今となつては部族の掟に従う氣は毛頭なかった。あの裁決の場で恐怖も恥も意識することなく自分の死を求めた彼は、その場所を離れたときからずっと自分が墮落したという意識に苛まれており、その思いは未だに彼の意識の中に生々しく残っていて、今やそれを前と同じように認めることなどできなかった。これまで何度も彼の肩を勢いよく殴っていたイゼベル¹⁴に対し、仕

返しに拳固で殴り返してやりたい気持ちに駆られたが、友人のことを考えて我慢し、あらん限りの気力と敏捷さを使って巧く女の追跡をかわす覚悟を決めた彼は、ただ先へ進むことで心の不満を抑えた。セロニーは灰色の大熊のように頑丈であり、また野生の七面鳥よりも足は速かった。さすがの女丈夫のマクラーといえども、その力と気力を發揮するセロニーの足とは歴然とした差があることは、すぐにわかった。女は執拗に後を追った。自分の命令に敢えて従おうとせぬ男の図々しさに怒りが増大し、これに刺激されたためであつたが、セロニーは追いかけてくる女よりも速く逃げた。時間が一刻一刻経てば経つほどに二人の間隔は開いていった。とうとう女を振り切った獵師は、女の姿がもはや見えず声も聞こえなくなると、自分の幸運に安堵したが、気がついてみると、彼の友人が非常に奇妙な形で姿を消した場所に再び近づいていた。そこで彼は苦勞しながら再び綿密に探索を始めたが、その間中閉じ込められているコナティーはじつとそれを見ていた。もう一度セロニーは戦士の体を堅くて荒い樹皮で包み込んでゐる木の不規則に広がっている枝や腕を広げたような大枝の下を腹這いになって探した。もう一度彼はその場所から絶望し希望を失つて出てきた。これが終わるか終わらぬうちに、あのマクラーのあまりに耳慣れた甲高い金切り声が森の中に響き渡り、捕虜は激しい恐怖を覚え、セロニーは苛立つばかりだった。セロニーは声が聞こえるとすぐに走り出し、彼の足跡を間違ふことなく追いかけてきたマクラーがそこに着いたときには、若者の姿はもう見えなかった。

「もう駄目だ、足が動かない」と女は叫んだ、「あいつめ、それにコナティーのやつ、呪われてしまふがいい。一人を失うことで二人とも失う羽目になつちまつた。足がふらふらでもう先へ進めない。セロニーのやつ、あの片目のタステナギーの魔女の奴隷にされちまえばいいんだ」

このように慎み深い呪いの言葉を發した口やかましい女は、疲れ切った様子で、コナティの膝になっている、見る者の目を奪うような苔の絨毯に腰掛けた。すると、忽ちそれまで女の夫の手足を捕まえていた枝がその力を緩めた。この一瞬は余りに貴重でぐずぐずして好機を逃すわけにもいかない。彼は巧みに、そして力を込めて女の下から抜け出た。女には防ぐ力もなく、實際余りに突然の出来事に抵抗しようもなかった。女は夫が突然目の前に生き返った姿を現し、以前と同じように本能的に逃げ出そうと構えているのを見てただ狼狽するばかりであつた。女は大声を上げて夫を呼んだが、彼は足を速めるばかりであつた。女は夫の後を追おうともがいたが、女の夫を掴んだ手を緩めた枝の群は女の手足を再びがっちりと掴んでいた。褐色の樹皮は至るところで既に女を覆い始めており、僅かな時間だけ自由を許された女の舌が彼を激しく攻め立てるだけであつた。だが、女がほんの僅かな言葉を發した途端に、樹皮が女の両顎を包み込んでしまい、以前コナティを非常に苦しめた蔓の不快な棘が女の口元に陣取つた。

第九章

女の声が止んだとき夫は一度だけ後を振り返つた。それから、自分の破滅への運命が終わりを告げたという胸震いするような喜びを感じた彼は、今や二倍も幸運に恵まれた思いを抱きながら、命拾ひしたこの危険な地帯を大きく避けるようにして一周すると、例の木に囲まれていたときですら逃げていく姿を自分の目でじつと追っていた友人を探して先へ進んでいった。しかし、口やかましい女から追われていると思ひ込んで逃げているセロニーに追いつくのは並大抵のことではなかった。だが二人の戦士が再会したとき

の喜びようは大変なものであった。二人は長時間、互いに熱烈に抱き合った。コナティーは自分の不運な出来事について細々と語り、自分が捕らえられた経緯を話した。樹皮が彼の手足を包み込んだこと、複雑に入り組んだ魔力が自分のナイフも、それから彼の勝利の記念品である狼の毛皮も包んでしまったことを語って聞かせた。しかしコナティーは彼の妻と彼女が捕まったことについては一言も話さなかったから、セロニーは友人が囚われの身から解放されたのはタステナギーかその妻の片眼の女の横暴気ままな気持ちに何らかの変化があつたせいだと思ひ込んだままであつた。

「でも、コナティー、毛皮とナイフのことだけど、あのままほっとくわけにはいかないぞ」とセロニーは言つた、「これから戻つて木から毛皮とナイフを取り出そう」

コナティーは気が進まないことを素振りに見せた。彼はマクベスの言葉を使つてまもなく「俺はもう行かん」¹⁵と答えたが、勿論これを引用句として用いたわけではない。しかし、友人がこのようにしづるのはようやく逃れてきた悪魔を当然恐れてのことだと判断したセロニーは、二つの品が包み込まれている突起部分をはつきりとわかるように指し示してくれさえすればこの危険な仕事は自分がやつてもいいとはつきり申し出た。友人の決意が堅いことに氣づいた夫は、必要であれば自分でやると答えた。

「もしどうしてもそれをやらねばならんのなら」と彼は言つた、「どうして君が危険を冒す必要があるのか。俺が自分でやるさ。そんな危険から後込みしようものなら、女のように怖がつていと言われるからな。それじゃ行こうか」

コナティーがこのような決断に達した論法はあまりに出し抜けのことであると同時に、また、同じ状況に立たされた夫なら理解に難くないものでもあつた。もしセロニーがこの仕事をやることになれば、彼の

ナイフが不運か過ちによって、排除するに値しないか排除の必要のない枝を切るか、また樹皮の幾つかの部分を取り除くことになるかもしれないと彼は恐れたのである。そのような不幸な結果の後に生じるかもしれないぬ意外なものが暴露されることを考えただけでコナティは身震いしてしまった。だからこそ持てる力を奮い起こして、彼はセロニーと一緒に例の場所へと向かったのだが、セロニーがじつと彼のやり方を観察している中、彼は狼の毛皮が包み込まれたのを目にした木の膨れたかさぶた状のところの切除に、正確に慎重に取り掛かった。これを見てセロニーはおもしろくもあり、同時に驚きを覚えた。コナティがさながら処女の目から埃を取り出すかのように用心してこの手術をしている間、木の中の口やかましい老婆は夫の動きをすべて察知して、初めは自分を助け出してくれているとばかりに勝手な希望を抱いていて、絶えず口と手足を懸命に動かしたが、無駄であった。人間の胸の努力というより幼児期の西風の溜息と言った方がいい女の僅かな息づかいがどこにあるかをコナティは知っていたが、彼の耳には内側で爆発しそうになっているが幸運にも抑えられている火山の印でしかなかった。これまで自分が長い間やむなく辛抱してきた苦しみから今や完全に逃れることができたのだ、これから先永遠に逃れることができると思つたとき、彼の心はこれまで長年知ることとはなかった新たな喜びのために躍った。自分の宝物を再び手に入れる手術を終えると、彼は高慢な行爲に出た。それは突然に得た自信を驚くほど表していた。自分が前同じ状況にいたときあらゆるものを見ていた樹皮の小さな穴、女も恐らくは見えている筈だと彼が考えた小さな穴を彼は覗いた。以前ならとても怒らせる勇氣はなかった例の目に向かって、彼は素早くあざ笑うようななじるような視線を向けた。目が合うと急に彼は後ろに下がった。あまりに突然の飛び退きようで、一部始終を見ていながら真相を全く知らぬセロニーは友人が昆虫か何かに刺されたものと思い、友人に尋ね

た。

「セロニー、もうこれでここはおさらばだ」慌ただしい答えが返ってきた、「ここでぐずぐずしてやる必要なんかないからな」

「そうだな」とセロニーは答えた、「ところで言い忘れていたんだけど、君の奥さんのマクラーが君を探してこっちに向かっているんだ。ほんの少しばかり後の方に置いてきたんだ、ここでまた会うと思つてね。でも疲れていることだろうし、道端で休んでいるのかもしれない」

「休ませておけばいいさ」とコナティーは言った、「あいつがこれまで俺にくれたものに比べれば非常に贅沢な楽しみというものだ。俺があいつを探しに行く必要なんかないさ、あいつの方で俺をすぐに見つけ出すさ」

セロニーは、この獵師が死んだものと思われていたとき村で起こった取引の経緯については心優しい気持ちから伏せておいたが、コナティーはその事実を他の方面から聞き、この友人が再び自分を探しにやってきただけでなく、友人の自分の妻への愛情が自分への愛情よりも大きくなかったという点においても共感を見せたことを知り、なおさらセロニーを愛した。二人が村に戻ると、誰もが獵師二人の帰還を見て喜んだ。口やかましい女のマクラーについては、コナティー以外に彼女の運命を知る者はなかった。彼は賢明な人間と同じように、自分の秘密が女を窮境から救い出すのに使われる危険性がなくなるまで自分の秘密を漏らさなかった。こうして年月は経ち、コナティーは老女よりもっと楽しい連れ合いを若い女性の中に一人見つけた。子供を何人かもうけ、齢と榮譽が彼の頭に数限りなく降り注いだ後のある日のこと、彼の息子の一人が例の森で狩りをしている最中にタステナギーの椅子の枝の一つにぶつかり、怖気をふる

うほど驚いたことに、その中に包み込まれた人間の腕を見つけた。これを見て息子はさらに探索を推し進め、不謹慎にも手斧を使つて枝を一本一本切り離していった。若者は崇敬の気持ちもみせず扱っている人々との関係がどれほど近いものか夢にも思わず、ほとんどためらうことなく枝の破片を払つた。彼が小屋に戻りこの話をする、セロニーはコナティーを見たが何も言わなかつた。事の真相はすぐにセロニーには明らかとなつた。コナティーはそれでも秘密は漏らさなかつたが、記憶にはつきり残っている場所に行き、野ざらしの遺骨を集め、それを部族の塚に丁重に葬つた。

この物語を終えるに当たつて、セロニーが彼の恋人、つまり、彼がマクラーと結婚するのを止めさせたことはあるがその結婚を止めさせるために恋人の命を奪うことは断固拒否したあの可愛い少女と結婚したことを言つておく必要はあろう。さらに、セロニーには彼の秘密をすべての人に漏らさずにおくことはできなかつたとコナティーが信じていた理由はひとつしかなかつたが、それは、セロニーの若い妻メドリーが冷静沈着に夫を見ていたことであつた。「しかし今にわかるさ」とコナティーはこの確信を抱きながらささやいた、「セロニーはこの秘密を打ち明けたことをやがて後悔することになる。なぜなら、タステナギーの肘掛け椅子にあの娘を座らせることはこれから先絶対にできないからな。あいつが賢明な人間だったら、秘密は漏らさずにいただろうし、そうすれば邪惡な妻を取り除くことなどいとも簡単であつたはずだ」

訳注

1 「カトーバ」は「川の人々」の意。サウスカロライナのスー語族の中で最大の部族で、ノースカロライナ州とサウスカロライナ州の州境の南のカトーバ川沿いに住んでいた。チェロキー族とは常に敵対関係にあった。ガイルズとハドソンによればコナティ、マクラ、セロニーのいずれもシムズが先住民的な響きの名前として作ったもの。

2 野生の蜜蜂が巣を作る空洞のある木のこと、シナノキなどがその例。

3 二つともサウスカロライナのピードメント高原地帯を流れる川。パコレット川はノースカロライナ源流のブロード川に注ぐ。ブロード川は昔チェロキー族とカトーバ族の境界線であった。

4 ブロード川の支流。エノリー川とほぼ平行して西に流れる。

5 サウスカロライナ州北西部の都市で、州最大の桃の産地。

6 口やかましい女で悪妻の典型とされる、ソクラテスの妻。

7 エノリー川はピードモント高原地帯を南東に流れブロード川と合流。

8 ピードモント高原地方の落葉樹地帯と違い、大西洋岸地方は常緑低木で覆われ、狩猟の主な獲物は鹿や七面鳥であった。「ターキータウン」はまた昔のチェロキー族の町の名前のひとつで、例えば、一八一六年、アンドリユー・ジャクソンが領土問題でチェロキー、クリーク、チカソー族の代表と会談したのはクーサ川沿いのターキータウン。

9 フランス人はサヴァンナ川を「シュワン川」と呼び、「ショーニー」は「南部人」を意味するアルゴンキアン語の「ショーウン」に由来する。オハイオ生まれのショーニー族のテクムセ（?一七六八—一八一三）は集団のマジック・シンボルとして赤く塗った棒を用いた。元来テクムセの赤い棒を受けた先住民を指したが、やがて先住民の戦士を意味するようになる。

10 サウスカロライナ州のチェロキー郡の南西部から南東に流れブロード川に合流。

11 チェロキー族はブロード川をこのように呼んだ。

12 「ウインディムーン（風が強い月）」はこの物語では秋から初冬にかけての木枯らしの季節を意味すると思われるが、チョクトー族の月暦によれば六月、チェロキー族の月暦では三月、つまり新しい

年の「最初の新月」を意味した。チェロキー族のこの月を表すのに用いられた表象は幸運な獵師の力ナティであった。

13 カトーバ族はスー語族に属するが、「タステナギー」はクリーク語（マスコギ語族）では「戦士」や「酋長」の意で、しばしば戦士の名として用いられた。第二次セミノール戦争でオセオーラと一緒に戦った有名な酋長の一人にハレック・タステナギー（？一八〇七？）がいる。ブッカー・T・ワシントンが作った黒人学校タステイギも同じ語源。

14 邪惡な女、毒婦。イスラエル王アハブの妻イゼベル（『旧約聖書』「列王記」）から。

15 『マクベス』第二幕第二場のマクベスの言葉「おれはもう行かん。自分のしたことを考えるのもおそろしい」への言及。